

## 年間第 33 主日 (マルコ 13:24-32)

わたしの言葉は決して滅びない



最近二度にわたって司式司祭の椅子に猫がいたずらして、「けっこう毛だらけ」になってました。平日の朝ミサで、集会祈願を唱えて椅子に座ろうとしたら毛だらけの椅子に気づいて、「あ、こりゃ座れないわ」と諦めて別の椅子を取りに行きました。

この猫のいたずらを見て、私はイエス様が律法学者を非難する場面を思い出しました。「律法学者に気をつけなさい。彼らは長い衣をまとって歩き回りたがり、また、広場で挨拶されること、会堂では上席、宴会では上座に座ることを好む。」(ルカ 20・46) 猫の中にも上席、上座を好む奴がいるのだなと出来事を振り返っていたのです。

聖書を読めば、あらゆる場面に、当てはまる聖書の箇所があるように思います。新約聖書は2千年も前に書かれたのに、目の前で起こっている出来事、現代社会が置かれている状況を的確に捉えます。猫のいたずらさえ、聖書のどこかが頭に浮かぶのです。イエスのことばが現代にあって生きていると、この一つをとっても分かるのではないのでしょうか。

今週の福音朗読は、人の子が来るまでに起こるであろう出来事を並べています。ただ、ここにあるような天変地異は、私たちに何かもたらしてくれるのでしょうか。太陽が暗くなって、星が落ちて、天体が揺り動かされる。それを、いつか起こることとして警戒していても、何か生活に良い影響を与えるのでしょうか。

それらはいつか起こるのでしょうが、それを恐れて生きていても何も良いものは生み出さないように思うのです。今週の朗読で、捉えなければならない箇所は、別のところにあると思います。

「いちじくの木教え」の部分で、「夏の近づいたことが分かる」「人の子が戸口に近づいていると悟りなさい」とありますが、人は皆、何かを分かり、何かを悟れる能力を与えられています。何を分かり、何を悟ればよいのか。それは、「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」(13・31) 中田神父はこのことばだと考えています。

たとえ、天変地異が起こることを知り、悟ったとしても、それで人が何かを掴むということはないでしょう。しかし、「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」このことばを知り、悟るなら、今を生きる私たちに必要な知恵を得ることができるのではないのでしょうか。

「人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。」(13・26) その時がやって来ますが、それは破滅の日ではなく

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

て、救いの日です。なぜなら、私たちは日々イエス様のことばにとどまって、養われて生きているからです。「人の子は天使たちを遣わし（中略）彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める。」これも救いの訪れです。「わたしの言葉は決して滅びない」と固く信じてその日を迎えるからです。

この世界に、確かなものがいよいよ見いだせなくなっている中で、イエス様の言葉は決して滅びない確かなものです。これからも私たちはみことばに耳を傾け、それを拠り所にして日々を過ごしましょう。私たちはイエスの再臨を喜んで迎えることができます。イエスは、ご自分の約束が確かであることを証明するためにおいでになるからです。

王であるキリスト(ヨハネ 18:33b-37)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。